

Daniel O. Dahlstrom ; Daniel O.:
Heidegger's Concept of Truth
(Cambridge University Press, 2001,
v+462p.)

君嶋 泰明

本書の目的は、初期ハイデガーの真理概念の生成史を、「論理的先入見 (logical prejudice)」との批判的対決として描き出すことである。(以下「論理的先入見」はLPと略記する)。

著者によれば、LPとは、「真理の所在は言明やそれに類するもの[命題、主張、判断など]である」(xvi)、という暗黙の想定のことである。したがって、このLPのもとでは、真であるのは言明やそれに類するもの以外の何ものでもない。では、ハイデガーはどのような観点からこのLPを批判しているのか。少々回り道になるが、このことについて簡単に説明しておきたい。

まず、『存在と時間』においてハイデガーは、「存在する」ということがどのようなことを理解している存在者を、現存在 (Dasein) と呼ぶ。この現存在の存在理解は、(1) 自分の存在の理解と、(2) 他の存在者の存在の理解とに区別できる。さらに (1) は、(1a) 実際に存在することができるという意味での実践的な理解と、(1b) 自分を存在者一般としてとらえるという意味での観照的な理解とに区別できる。(1a) の

「存在することができる」ということは、いくつかの存在の仕方 (広い意味で行為と考えてよい) の選択肢が開かれ、それらを選択することができるということである。ところである行為は、つねに他の何らかの存在者との関わりを伴う。したがって、ある行為が選択できるためには、この行為に関わる他の存在者を、しかしかの存在者として理解していなければならない (靴を履くことができるためには、ある存在者を靴として理解していなければならない)。このように、(1a) には常に (2) が付随する。この場合の (2) を (2a) としよう。この (2a) においては、存在者は、ある行為にとって「手頃なもの (Zuhandenes)」として理解されている。そしてこの (2a) に特徴的なのは、人間が何らかの行為を予期することから生じるという意味で、「未来」に重点があるということ、そして、行為に没入しているという意味で、前反省的・非主題的であるということである。このように連関している (1a) と (2a) を、存在理解の〈没入モード〉と呼ぶことにしよう (以下同様に、ハイデガーが用いていない評者の表現には〈〉を付す)。

一方、(1b) は、行為に没入することから抜け出し、距離を置いて自らを反省的に眺めることによって可能となる。この距離を置いた眼差しは、自分を含めた存在者一般を行為の文脈から切り離し、「現在」という一様な平面上に「在り合わせているもの (Vorhandenes)」として理解する。この場

合の (2) を (2b) としよう。この (2b) に特徴的なのは、「現在」に重点があるということと、反省的・主題的であるということである。このように現存在の側の態度変更によって可能になる (1b) および (2b) を、存在理解の〈反省モード〉と呼ぶことにしよう。

ところでハイデガーによれば、ある存在者を主題化し、それについての何らかの言明をすることは、この〈反省モード〉に身を置くことで可能となる。したがって、「真理の所在は言明やそれに類するものである」とする LP は、同時に、真理を、現在という平面の上で「在り合せているもの」として理解している。これに対し、ハイデガーは、現存在の〈没入モード〉における存在理解を「開示性 (Erschlossenheit, disclosedness)」と呼び、これを「最も根源的な真理現象」とする。したがって、ハイデガーの LP 批判には、真理の所在を言明にしか認めない真理論 (以下 T と略記)、〈没入モード〉の存在理解を考慮しない存在論 (以下 O と略記)、これら二つに対する批判が含まれているのである。

さて、少々前置きが長くなったが、本書の内容に入っていこう。本書では、まず、LP 批判の三つの段階として、以下の三人の思想家が提示した真理概念をハイデガーがどのように解釈したのかが検討される。すなわち、T と O の両方を明確に打ち出したヘルマン・ロツェ (1 章)、T の支配からの突破口を作ったフッサール (2 章)、フッサール

にまだつきまとっていた O を取り払う道を示したアリストテレス (3 章) である。そして 4 章では、『存在と時間』において結実するハイデガーの真理概念が、同書の叙述に即して再構成される。最後に 5 章では、同書における真理概念に対する各種批判や問題の検討がなされる。以下、まずは 1~3 章の内容を紹介する。

ハイデガーは、真理の可能性や意味を検討する「哲学的論理学の現在の状況」を見渡し、なかでも決定的なのはロツェの『論理学』(1874 年) であるとする。ロツェは、プラトンのイデア論の解釈を通じて、次の四つの互いに還元され得ない「現実性の形式」を区別すべきであるとする。(1) 事物の存在、(2) 出来事の出来、(3) 関係の存立、(4) 文の妥当性。そして、彼は (4) を「真理」とする。注意すべきは、真理の所在が文に求められているだけでなく (上述 T)、(1) ~ (4) が、「現実性の形式」の名のもと、現在という平面の上に並べられていることである (上述 O)。このようにしてロツェは、「同時代の思想家たちの頭の中の LP に存在論的な枠組みを与えることで、この LP を強固にした」(p.30)。

だが、こうした共時的な趨勢のなかに、ある重要な例外が存在する、とハイデガーは言う。それがフッサールである。ハイデガーは、「フッサール現象学の三つの決定的な発見」、すなわち「志向性、範疇的直観、アプリアリの根源的意味」を、LP の支配からの突破口として位置づける。このうち志

向性を例にとろう。人間のあらゆる行為(意見を述べる、思考する、知覚する、期待する、など)は、何らかの対象に向けられている。フッサールは、経験に備わるこの普遍的構造を志向性と呼ぶ。著者の説明によれば、各種の志向は分断されたものではなく、流れの中で「充足 (fulfillment) の方向に進む」(p.60)。例えばエッフェル塔について話したり、想像したりすることは、様々な仕方や程度において充足される方向に進む。そして、この進行は、エッフェル塔を直接に知覚することによってひとまず完結する。このようにして、何か思念されたものが、知覚されたものと同定される(ある志向が充足される)とき、この同一性が真理と呼ばれる。この真理は、日常的な行為の文脈において、前反省的・非主題的にすでに経験されている。フッサールはこのようにして、言明の真理に先行する現象学的真理があることを示した。

だが、これだけではまだ片手落ちであるとハイデガーは考える。なぜなら、この同一性としての真理は、まだ現在という平面の上で「在り合せているもの (Vorhandenes)」と考えられており、上述のOを克服できていないからである。結局、「フッサールの分析は、LP そのものにはないにしても、LP の存在論的諸前提のヴァージョンにとらわれたままなのである」(p.177)。

これに対し、ハイデガーは、アリストテレス解釈を通じて、冒頭で述べた没入モー

ドの存在理解の構造を明らかにし、『存在と時間』に至る道を見出した。まずハイデガーは、『命題論』を解釈し、言明が真や偽でありうるのは、言明が、何かを何か「として (als)」提示する、という構造を持っているためであるとする。例えば「アンナはヴロンスキーの恋人となった」という言明が真か偽であり得るのは、この言明が、(実際に恋人であるかどうかにかかわらず) アンナをヴロンスキーの恋人「として」提示するためである。例えば誰かが「アンナ」とだけ言ったところで、この発言の真偽について考えることはできないだろう。言明が何かを何かとして提示するときに初めて、この言明が真か偽である可能性が生じるのである。何かを何かとして提示するこの言明の構造を、ハイデガーは「命題的『として』構造」と呼ぶ。

ところで、ある人が何かについての言明をすることができるためには、この人はこの何かを、先行的にしかじかのもの「として」理解していなければならない。ハイデガーは、この言明に先行する理解の構造を、「解釈学的『として』構造」と呼ぶ。著者によれば、この理解は、例えば次のようにして形成される。ある人が渋滞に先んじるために、古い高速道路を近道として利用したとする。このとき、高速道路は、「渋滞に先んじるために」という未来の目的のほうから、「近道として」理解されている。そして、このようにして目的論的に未来の方から形成される存在理解こそが、冒頭で述べ

た没入モードの存在理解、すなわち開示性に他ならない。こうして、「[アリストテレスは、]真理の根源的意味を、存在者の『開示性』[...]のプロセス、現前性とは同一視されえないプロセスとして提示した」(p.180)。

さて、こうして上述のOに包摂されない存在論の可能性を見出したハイデガーは、『存在と時間』において、<反省モード>と<没入モード>のどちらの存在理解をも可能にする超越論的地平として、「時間」を取り出すことを目指すこととなる。だが本書評は、このことが詳説される4章には立ち入らず、ハイデガーの真理概念にまつわる、ある問題に触れて閉じることにする。

すでに述べてきたように、開示性は、前反省的・非主題的であるという特徴を持っている。一方、言明は、あらかじめ開示されたものを主題的に取り上げるという特徴を持っている。したがって、著者の言うように、「自分を非主題的に開示する真理の根源的意味を、彼は主題化しなければならないが、その企ては、『主題化のパラドクス』とでも呼ぶべきものに陥るように思われる」(p.236)。この問題に、ハイデガーはどのように対処しているのか。

著者によれば、ハイデガーはこれを、「形式的表示 (formal indication)」によって回避している。形式的表示とは、内実を欠いた、純粹に形式的な表現であり、例えば「として」、「現存在」、「世界」、あるいは「哲学」の語さえも、この形式的表示である。これ

らが表示するのは、「各人自身が具体的に遂行すべき課題」(p.437)であり、「つねにすでに非主題的に『ここに』存在しているが、再現されることによってのみ表現される何か」(ibid.)である。形式的表示は何かを主題化するが、それは内実を含まないがゆえに、特定のものとして対象化されて、反省モードに引き上げられることはない。むしろ、没入モードにおいて具体的な「現存在」、「世界」、「哲学」などとして再現することを、読者に促すのである。こうした形式的表示を駆使して、ハイデガーは、「主題化のパラドクス」を回避しつつ、前反省的・非主題的なレベルでの真理現象について語ろうとしているのである。

以上、大まかに本書の概要を紹介した。最後に触れた形式的表示に関しては、著者自身が、「開示性としての真理と命題的真理との間の暗黙にして説明されざる相補関係」(xviii)と述べているように、少なくとも『存在と時間』においては説明はなされておらず、今後さらに検討されるべきだろう。

なお、本書は、ドイツで公刊された *Das logische Vorurteil: Untersuchungen zur Wahrheitstheorie des frühen Heidegger* (1994) を著者自身が英訳したものである。そのせいもあってか、ハイデガー独特の術語を訳す際には、多くの紙幅を割いて補足的な説明がなされている。ハイデガーの術語や独語に抵抗のある読者にとっても比較的読みやすい著作ではないだろうか。